

分野（ 2 ） 気管支ぜん息・COPD患者の健康回復に関する調査研究

研究課題名：呼吸リハビリテーションの実践及び客観的評価手法

申請課題名：呼吸リハビリテーションの実践及び客観的手法に関する研究

調査研究代表者氏名：千住 秀明

評価コメント

・行政と医師会に働きかけて、健診・教育システムを地域展開するモデルを構築し、また、この事業を地域に拡大するための人材養成を実践する地道な研究で、ソフト3事業の主旨に即している。

・喘息やCOPDで呼吸機能が低下している患者に呼吸リハビリテーションを行うことは重要なことである。ただ、どのステージでリハビリテーションを開始すべきか十分検討する必要がある。また、リハビリテーションの有効性を正確に評価するためには、比較症例のマッチングを正確に行うことが大切である。

・呼吸リハビリテーションを熱心に推進しておられるが実績を期待している。病診連携は重要である。

・IPAGによるリスク患者の抽出後のスパイロテストによる確定診断のための受診への流れを更に工夫することも期待したい。2013年は健康日本21改定によるCOPD認知率向上プログラムが対象地区でも展開されることも予測されるので、リハビリテーションの有用性についての理解も深めるための協同作業も進めて行くのが良い。

・11施設から8施設を中核病院として選定した（倉敷、東京、大阪）が、医療担当者側の講習会参加者を更に増やす努力が必要であろう。

・システムを構築する上で円滑に進めるための社会的要件を明らかにして欲しい。

・応募してきた病院の医師、看護師、理学療法士を対象に体験型学習を実践している。すでに11機関から応募があり、主に長崎県で体験型学習会を開催している。来年度、倉敷、東京、大阪へ事業を拡大してゆく予定であるが、一部予備段階の作業が遅れており、今年度（平成24年度）に予備段階を行っていないと事業の拡大は難しいのではと考えられた。

・アプローチ、方向性と問題ないが、スクリーニングにスパイロを用いるので人手や機器の問題が大きくなるのではないかと？患者数と医療機関受診者の数の比が小さいCOPDでは核となる医療機関が数多くの体験型学習を行う必要があり、それにより早期発見、早期介入につながる。公募型であるので、地域が偏る可能性が高く、それを如何に克服するか大きな課題になる。

・呼吸リハビリを地域で行うシステム構築のために、スパイロメーターの台数不足が問題のひとつのようであるが、解決の方策はいろいろ工夫していただいて、良い方向に行くことを願っている。